



Title	シベ語の方言差における「ねじれ」について
Author(s)	文, 静児; Wen, Jinger
Citation	北方言語研究, 15, 289-299
Issue Date	2025-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/112982
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94627
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_Wen.pdf



[資料・研究ノート]

シベ語の方言差における「ねじれ」について

文 静 児

(東京外国語大学大学院)

キーワード：シベ語、方言研究、ウムラウト、社会言語学

1. はじめに

本研究では、シベ（錫伯）語の方言について、先行研究の資料と筆者が現地調査により採録した資料をもとにシベ語の各方言間の差異を論じ、その差異を生み出す要因を解明する。李樹蘭（1997）の先行研究によれば、母音 *i* の前の母音 *a* は、チャプチャルの方言では満洲語の文語と比較してウムラウトが発生したが、イチャガシヤンの方言には見られないとされている。しかし筆者の調査により採録された資料では、李樹蘭（1997）とは反対にイチャガシヤンの方言でウムラウトが見られ、チャプチャルの方言ではウムラウトが見られない。つまり、李樹蘭の資料と筆者の資料では、ウムラウトの有無についてチャプチャルとイチャガシヤンの方言が逆になっている。本研究ではこれを「ねじれ」とよび、このようなねじれた対応関係が生じた経緯の解明を目指す。そして結論として、今回筆者が調査したイチャガシヤン方言の形式は李樹蘭（1997）のチャプチャル方言の形式と一致し、李樹蘭（1997）のチャプチャルの方言の伝播を受けることと、筆者が調査したチャプチャルの方言は満洲語の文語と近い、チャプチャル方言の新しい形式への変化が起こっていることを示す。

本論文の構成は以下の通りである：第二節ではシベ語とその方言の概要を提示する。第三節は研究資料の収集方法と話者情報を紹介する。第四節は各方言の形式を比較・考察する。第五節は主に方言の変容に関し社会言語学的な要因に注目し考察を行う。最終の一節において、本研究をまとめた上で、今後の課題を述べる。

2. シベ語とその方言の概要

2.1 シベ語の概要

本研究で対象とするシベ（錫伯）語は、満洲・ツングース諸語の一つである。満洲・ツングース諸語はモンゴル諸語、チュルク諸語とともにいわゆるアルタイ諸言語に属するとされる言語群である。ツングース諸語にはシベ語のほかに、満洲語、エウエン語、エウエンキ語、ソロン語、ネギダル語、ウデヘ語、オロチ語、ナーナイ語、ウルチャ語、ウイルタ語、女真語といった言語が存在する。

元来、シベ族は中国の東北地方に暮らしていたが、一部は国境地帯で国境を護るため、一年以上をかけて 1765 年に現在の新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州（伊犁哈萨克自治州）まで辿り着き、ここに住むようになった。以降、現在に至るまでシベ族は新疆ウイグル自治区に居住している。

シベ語は満洲語と近い関係にあり、満洲語の方言とする研究も存在する。ただし、シベ語が話される地域は新疆ウイグル自治区、満洲語が話される地域は中国の東北地方と、互いに

隔絶している。東北地方に残ったシベ族は、分散して居住していたため、漢族の言語や文化の影響を受け、次第にシベの言語を失ってきた。すでにシベ語は話さず、漢語しか話さなくなっている。新疆ウイグル自治区の各県・州に居住するシベ族は、集中して居住し、比較的大きな集団で生活していたため、言語や文字がよく保たれている。シベ語はシベ族の民族語として、口語のほか、満洲文字を継承したシベ文字による文語を持つ。また、満洲語の文語を習得するシベ族もいる。

2.2 シベ語方言の概要

2.2.1 李樹蘭（1997）

シベ語の口語における方言的差異について、李樹蘭（1997）はシベ語の内部にチャプチャル（察布査爾）・チャプチャル第5ニル（孫紮齊牛泉）・霍城県イチャガシャン（伊車嘎善）・タルバガタイ（塔城）という四つの方言を認めている。

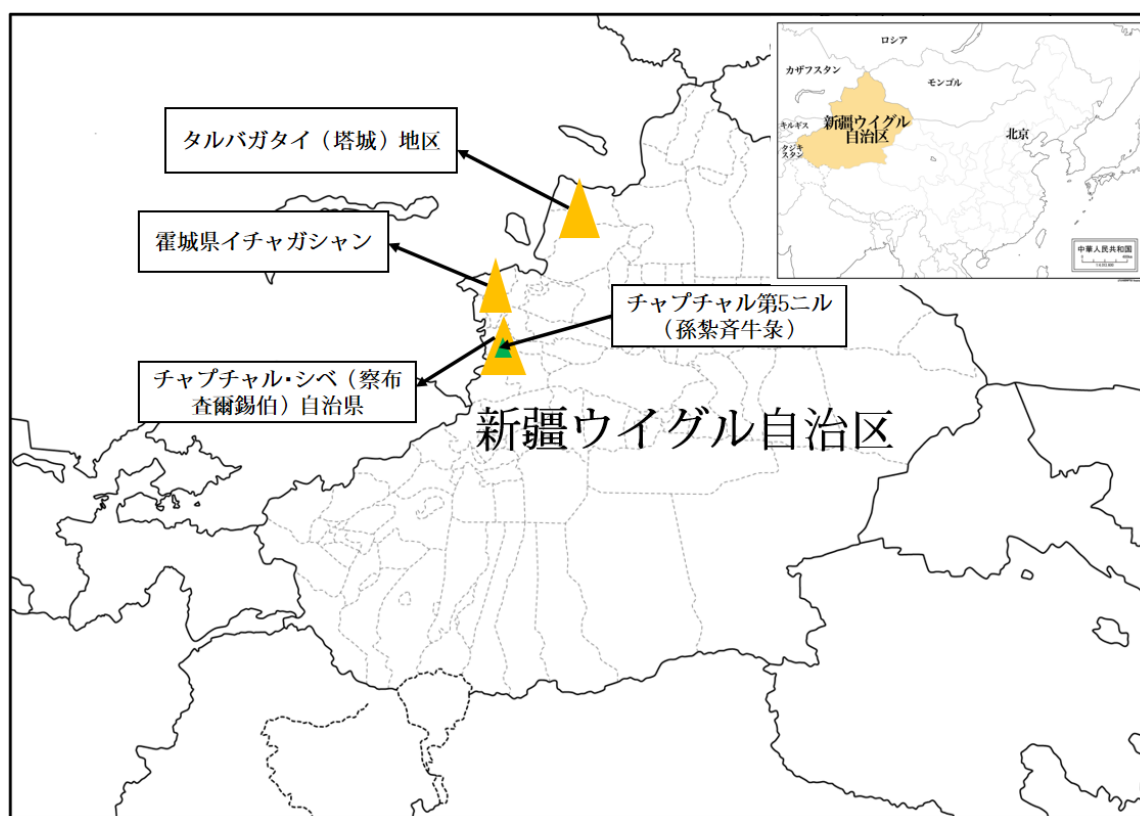


図1 李樹蘭（1997）に取り上げられているシベ語諸方言の分布

チャプチャルは、新疆ウイグル自治区のシベ族の最大の居住地である。清朝時代の八旗の軍隊の編成に基づいて分布しているチャプチャル第5ニルを含む八つのニルとよばれる村落がある。チャプチャルに居住するシベ族の総人口は約18,000人であり、新疆ウイグル自治区に居住するシベ族の総人口の55%以上を占めている。

チャプチャル第5ニルはチャプチャルシベ自治県の中に位置しているが、その方言の発音は他のニルと異なるため、別の方言とされている。チャプチャル第5ニルのシベ族の人口

は約 2,400 人で、ニルの人口の 31%にあたる。

霍城県イチャガシヤンシベ自治郷を中心とする霍城県イチャガシヤンは、総人口が約 11,674 人であり、そのうちシベ族の人口は約 15%にあたる 1,690 人である。1962 年より以前、この地域のシベ族は主にカザフ族とともに暮らしており、日常的にシベ語の他にカザフ語も話していた。1962 年に入り、大量のカザフ族が同地を離れる一方、大量の漢民族が同地に流入した。以降同地のシベ族は漢民族とともに暮らすようになり、シベ語の他に漢語を使うようになった。

タルバガタイ地区・喀拉哈巴克（カラハバカ）を代表とする塔城県には、主にカザフ族が暮らしており、シベ族は僅か 930 人しかいない。この地域のシベ族は生活習慣においてカザフ族の影響を受けているのみならず、カザフ族の言語・文字も使用している。他の民族と通婚した家庭もあるが、そのような家庭の共通語は主にカザフ語である。

また、李樹蘭（1997）は、シベ語の内部の変化として、主に、満洲語の文語の形式からの変化と、新疆に移動した後に起こったシベ語内部の変化の二種類があると指摘している。前者は主に、各地域における満洲語の母音と子音の変化で示されている。後者は主に、新疆に移住した、周辺言語の影響であることを示している。

2.2.2 趙傑（2012）

趙傑（2012）は、イチャガシヤンでよく使われるおよそ 100 の基礎語彙を考察し、イチャガシヤンのシベ語の方言が満洲語の文語に近く、満洲語の口語の 20 世紀 80 年代の段階の音と対応することを指摘している。

2.2.3 服部四郎・山本謙吾（1956[1969]）

服部・山本（1956）は、恵遠城第 6 ニルと第 8 ニルの方言の差異の存在を指摘している。

2.2.4 烏拉熙春（1986）

烏拉熙春（1986）によると、チャプチャルシベ自治県の八つのニルのシベ語の話者は、清朝の乾隆年間に東北地方において編成された際に、同じ地域から集められたわけではないが、現在各ニルの話者が話す言語の間にはそれぞれ異なる方言として区別するほど十分な音声的な差異は見られない。しかし、唯一特別なのはチャプチャル第 5 ニルのシベ語であり、地元の人によると、第 5 ニルの人々は最初にイリに來た時には、他のニルとは異なる言語を使用しており、その後、満洲語を学んだために、彼らの話す口語は満洲語の文語に近いという。

2.2.5 鄭仲燁（2019）

鄭仲燁（2019）は、チャプチャル第 5 ニルの方言が文語に近いとするなど、個々の方言の特徴を文語との関係（近さ）の観点から論じている。

2.3 シベ語とその方言のまとめ

上記の先行研究によると、新疆ウイグル自治区のシベ語は四つの方言地域に分かれ、その

中でイチャガシャンとチャプチャル第 5 ニルのシベ語は文語に近く、チャプチャルシベ自治県内の各ニル間も差異がある。

3 研究方法と話者情報

3.1 研究目的

本研究ではシベ語の口語の方言差を踏まえ、特にチャプチャルの方言とイチャガシャンの方言を対象として、満洲語文語における母音 i の前の母音 a 或いは複合母音 ai の各方言間の変化と形成を考察する。

3.2 研究方法

本研究で提示する資料は以下の方法で収集・採録したものである。

1. 李樹蘭ほか（1986）に付録として掲載されている語彙（約 1000 個）を選択し、シベ語の口語の方言差を調査するための語彙調査票を作成する。
2. 調査票にある単語について、満洲語文語における母音 i の前の母音 a 或いは複合母音 ai を持つ語彙を整理し、チャプチャル第 3 ニル方言話者 A 氏、第 4 ニル方言話者 B 氏とイチャガシャン方言話者 C 氏に対して調査と音声の採録を行う。調査票の中の 14 個の語彙が該当する。
3. 本研究は主に李樹蘭（1997）の先行研究の資料と比較するため、李樹蘭（1997）による三つの語彙（樹・雄（鶏）・山）について、イチャガシャンとチャプチャル方言地域の音韻規則に基づき、チャプチャル第 3・第 4 ニルの方言とイチャガシャンの方言との差異を個々の音ごとにまとめて比較・分析する。
4. 社会言語学の観点から李樹蘭（1997）と筆者の採録した形式の差異について考察する。

3.3 話者情報

本研究で扱う筆者が採録した話者の情報は以下の表 1 のようにまとめられる。

表 1 筆者の調査による、話者の情報

話者	生年	性別	出生地	居住地	文語知識	主な使用言語
A 氏	1965 年	女	チャプチャル 第 3 ニル	チャプチャル 第 3 ニル	勉強中	シベ語
B 氏	1957 年	男	チャプチャル 第 4 ニル	チャプチャル 第 4 ニル	勉強中	シベ語
C 氏	1940 年	女	イチャガシャン	ウルムチ市	なし	シベ語と漢語

4 李樹蘭（1997）の調査と筆者の調査にみられる「ねじれ」

本節では、筆者が採録した資料を先行研究の資料と比較することにより、チャプチャルとイチャガシャンの方言の音変化をそれぞれ解明する。

4.1 ウムラウト

以下の表 2 と 3 を見ると、李樹蘭 (1997) のチャプチャルの形式は筆者が採録したイチャガシヤンの形式と一致し、[ɛmilin] [ɛlin] のようにウムラウト（母音 i の前の母音 a の前舌化）が起こっている。李樹蘭 (1997) のイチャガシヤンの方言は筆者が採録したチャプチャル第 3・4 ニルの音と共通し、[amilan] [alin] のようにウムラウトが起こっていない。このように、李樹蘭 (1997) の資料と筆者の資料の間には互いにチャプチャル方言がイチャガシヤン方言と一致するというねじれの対応関係が見られる。

表 2 李樹蘭 (1997) による文語「雄（鶏）」と「山」の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル	イチャガシヤン
雄（鶏）	<u>a</u> mila	[ɛmilin]	[ɛ <u>a</u> milan]
山	<u>a</u> lin	[ɛlin]	[ɛ <u>a</u> lin]

表 3 筆者の採録した資料における「雄（鶏）」と「山」の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル 第 3 ニル	チャプチャル 第 4 ニル	イチャガシヤン
雄（鶏）	<u>a</u> mila	[<u>a</u> mil]	[<u>a</u> mil]	[ɛmilin]
山	<u>a</u> lin	[<u>a</u> lin]	[<u>a</u> lin]	[ɛlin]

4.2 イチャガシヤンの音変化

筆者の採録したイチャガシヤン方言の形式は、李樹蘭 (1997) のイチャガシヤン方言の形式と対応せず、むしろ李樹蘭 (1997) のチャプチャル方言の形式に近い。

満洲語文語における母音 i の前の母音 a に対応する母音を見る。まず、上記の雄（鶏）と山のように、李樹蘭 (1997) は、満洲語文語における母音 i の前の母音 a はチャプチャルの方言で [ɛ] となるが、イチャガシヤンの方言は変わらず [a] となると指摘している。

しかし、筆者が採録した資料では、母音 i の前の母音 a はチャプチャルの方言では文語と同様に [a] になるのに対し、イチャガシヤンの方言では [a] から [ɛ] に変化している。つまり、筆者の調査でイチャガシヤンの方言は李樹蘭 (1997) のチャプチャルの方言と同様である。

一方、満洲語文語の母音 i の前の母音 a が、イチャガシヤンの方言で [ɛ] に変化しない場合もある。この例は、筆者が採録した以下の表 4「手紙」の資料に見られる。語の形式は満洲語文語と一致しないが、筆者のイチャガシヤンの調査で、母音 i の前の a は a のまま残ったことがわかる。この例では、筆者が採録した資料ではチャプチャルでもイチャガシヤンでも、すべて李樹蘭 (1997) の提示した対応関係が当てはまった。つまり、筆者が採録したイチャガシヤンの語には李樹蘭 (1997) のいう古い音が残ったと考えられる。

表 4 筆者の採録した資料における「手紙」の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル 第3ニル	チャプチャル 第4ニル	イチャガシヤン
手紙	jasigan	[dzɛiɣan]	[dzɛiɣan]	[dzæiɣan]

次に満洲語文語において二重母音 ai で現れる母音の対応を見る。はじめに、満洲語文語の二重母音 ai に対応する音が以下の表 5 のように、「金」と「眉毛」の語についてはチャプチャル第3・第4ニルとイチャガシヤンの方言のすべてで二重母音 [ai] として現れる。「掬う」と「呼吸する」の語については、チャプチャル第3・第4ニルとイチャガシヤンの方言のすべてで二重母音 [iɛ] で現れている。

表 5 筆者の採録した資料における二重母音 ai の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル 第3ニル	チャプチャル 第4ニル	イチャガシヤン
金	aisin	[aijin]	[aijin]	[aiɛin]
眉毛	yasa faitan	[jazi faidən]	[jazi faidən]	[jasi faidan]
掬う	waidambi	[viɛdəm]	[viɛdəm]	[viɛdəm]
呼吸する	ergen gaimbi	[ərɕən giɛm]	[ərɕən giɛm]	[ərɕən giɛm]

次に、「樹」の語を見ると、李樹蘭(1997)のチャプチャルの方言の形式が [χɛlin] であるのに対し、筆者の調査によるイチャガシヤンの方言の形式は [χalin] になっており、李樹蘭(1997)のチャプチャルの形式が筆者の採録したイチャガシヤンの形式と一致しない。

表 6 李樹蘭(1997)による「樹」の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル	イチャガシヤン
樹	hailan	[χɛlin]	[χailin]

表 7 筆者の採録した資料における「樹」の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル 第3ニル	チャプチャル 第4ニル	イチャガシヤン
樹	hailan	[χalin]	[χalin]	[χalin]

李樹蘭(1997)の原文は「満語书面語中位于元音 i 前面的 a 或复合元音 ai, iya, 在察布查尔土语中为 [ɛ], 在其他土语中不变。」である。この文の前半は曖昧であり、二つの解釈がある。一つ目は、「満洲語文語における母音 i の前の二重母音 ai」、二つ目は「満洲語文語における二重母音 ai」である。しかし、hailan の ai の後には母音 i がない。

4.3 チャプチャルの音変化

以下の表 8 に示すように、李樹蘭 (1997) の資料と筆者が採録したチャプチャル方言の形式の間には差異が存在する。満洲語文語における母音 *i* の前の母音 *a* 或いは複合母音 *ai* は、李樹蘭 (1997) の調査では半広母音 [ɛ] で現れている。しかし、筆者の採録した資料では [a] で現れている。例えば、「山」と「雄 (鶏)」の調査で母音 *i* の前の母音 *a* は満洲語文語の *a* と一致する。「樹」は満洲語の形式が違い、*ai* は母音 *i* が脱落し、*a* になる。

表 8 李樹蘭 (1997) と筆者の調査によるチャプチャル方言の対応

	満洲語文語	李樹蘭 (1997)	チャプチャル 第 3 ニル	チャプチャル 第 4 ニル
樹	h <u>a</u> ilan	[χɛlin]	[χ <u>a</u> lin]	[χ <u>a</u> lin]
山	<u>a</u> lin	[ɛlin]	[<u>a</u> lin]	[<u>a</u> lin]
雄 (鶏)	<u>a</u> mila	[ɛmilin]	[<u>a</u> mil]	[<u>a</u> mil]

まず、李樹蘭 (1997) のチャプチャルの音変化を分析する。「樹」の満洲語文語は *ai* で現れるのに対し、李樹蘭 (1997) のチャプチャルの方言は母音の融合が起こって、二重母音は単音化し [ɛ] になる。しかし、筆者の調査したチャプチャルの音は融合が起こっていないし、満洲語文語と近い音で現れる。

また、以下の表 9 に示すように、満洲語文語の *a* に対応してチャプチャル第 3 ニルの方言とイチャガシヤンの方言では [ɛ] で現れるのに対し、チャプチャル第 4 ニルの方言では [a] で現れるような語もある。筆者の採録したチャプチャル第 3 ニルの音形は音韻規則の面から李樹蘭 (1997) のチャプチャルの音形に相当するが、筆者の採録したチャプチャル第 4 ニルの音形はそれとは異なり、満洲語文語の形式と同一である。このことは、筆者のデータでもチャプチャル第 3 ニルは古い音形を残し、第 4 ニルに満洲語文語の音形が新しい形式として入ったと考えることによって、説明が可能である。

表 9 筆者の採録した資料における「お隣さん」の各方言の対応

	満洲語文語	チャプチャル 第 3 ニル	チャプチャル 第 4 ニル	イチャガシヤン
お隣さん	<u>a</u> daki boo	[ɛdiek]	[<u>a</u> daki]	[ɛdiek]

4.4 まとめ

以上のことをまとめ、本研究では、イチャガシヤンとチャプチャルの方言に関し、以下のような通時的変化を提案する。

本研究は、李樹蘭 (1997) の先行研究の理論に基づき、満洲語における母音 *i* の前の *a* と二重母音 *ai* を再分析したものである。李樹蘭の結論によると、イチャガシヤンの方言は本来満洲語文語を元に成立した口語の変種であるのに対し、チャプチャルの方言は本来満洲語文語とは関係のない、独立した口語である。このため、イチャガシヤンの方言の語彙には

満洲語文語に一致する語形のものが存在する。

しかし、今回の筆者の調査で、李樹蘭（1997）の分析に加えて、新たに発見されたことがある。4.2 で見たように、筆者の採録したイチャガシヤンのデータには李樹蘭（1997）のチャプチャルの方言に相当する音形が規則的な音韻変化ではない形で入ったと考える。また、4.3 で見たように、筆者の調査したチャプチャルの音形に満洲語文語の音形が新しい形式として入ったと考える。さらに、筆者は李樹蘭の二重母音 ai への検討は偏っていると考え、今後の研究で再検討する必要がある。

つまり、本研究の冒頭で提示した両方言の対応の「ねじれ」は、満洲語文語における母音 i の前の母音 a がシベ語の各方言で変化したことによって生じている。チャプチャル方言のイチャガシヤンへの伝播、およびチャプチャルの方言の形式への文語の形式の流入の結果であると説明される。次節では、この仮説の傍証となる社会言語学的状況を歴史学の研究をもとに提示する。

5 シベ語の社会言語学的状況

本節では、四節で提案したイチャガシヤンとチャプチャルの方言の発展の傍証となる社会言語学的状況を歴史学の研究をもとに提示する。

5.1 イチャガシヤン方言の歴史的形成と満洲語文語

まず、イチャガシヤンのシベ族の歴史的状況について呉元豊（2022）によると、イリ（伊犁）に駐留する八旗の構成については、駐留兵士の出身が満洲族、モンゴル族、ソロン族、ダグール族、シベ族と多様である。その中で、イリ・ソロン（索倫）營の兵士は、ソロン族、ダグール族、シベ族の三つの民族で構成されていた。清朝同治年間末（1871-1875）に、イリ地域で戦争が起こり、ロシアがコルガス（霍爾果斯）川の西側にあるソロン營の兵士が駐屯していた地域を侵攻・占領した後、ソロン營の将兵とその家族の半数がタルバガタイ地区に移住することを余儀なくされた。光緒八年（1882）に清朝がイリを回復すると、タルバガタイのソロン營の兵士の一部はイリに戻り、回復したばかりのソロン營に統合され、タルバガタイに残った兵士は地元の新満洲營に統合された。1911 年に辛亥革命が勃発し、清朝は滅亡したが、ソロン營は残り、1938 年に廃止された。現在の新疆イリの霍城县とタルバガタイ地区に住むソロン族、ダグール族、シベ族は、清朝のイリ・ソロン營の末裔であると考えられる。つまり、イリ・ソロン營に編入された主な民族は、ソロン族、ダグール族、シベ族であった。戦争のため、ソロン營は再編成されたが、ソロン營内の各民族の人口割合や当時の兵士の使用言語に関する明確な資料はないものの、各民族間のコミュニケーションを円滑（容易）にするため、共通の言語が使われていたと考えられる。また、満洲語が「国語」であったという歴史的背景から、当時のソロン營のシベ語の母語話者と非母語話者の間では満洲語文語およびそれを元にした口語が共通語として使われていたと推測される。

5.2 チャプチャル方言の伝播

チャプチャルシベ自治県は周辺に散在する各県に比べ、比較的大きなシベ族の集落として人口が集中しており、シベ語が最も広く話されている地域である。また、イチャガシヤン

を直訳すると「新しい村」という意味である。集中的なチャプチャルに比べ、イチャガシャンは1984年にイチャガシャン・シベ民族郷として設立されるまで、幾度かの変革を経てきた。そのため、チャプチャル方言は他の地域の方言に比べて威信 (prestige) を持つ。イチャガシャンの人々は元来ダグールやソロン人で、シベ語母語話者ではなかったが、その後彼らは就職、教育活動、通婚などを経て、チャプチャルのシベ語母語話者が話すシベ語を習得するようになったと考えられる。現在、筆者の調査したイチャガシャンの方言が李樹蘭 (1997) のチャプチャルの方言と一致するのは、チャプチャルの方言をソロン営の人々が習得したためであると考えられる。

5.3 チャプチャル方言の変化

筆者が採録したチャプチャルの資料と李樹蘭 (1997) のチャプチャル資料に差異が存在することは、年代差による満洲語文語の使用状況の違いによると考えられる。李樹蘭の先行研究には明確な調査時期や調査対象の情報などが記されていないが、先行研究の発表時期と当時の歴史的状況から推測すると、李樹蘭の研究の話者は筆者が音声を採録した話者よりも古い世代の人であると考えられる。李樹蘭 (1997) の古い時代のチャプチャル方言と現段階で筆者が採録したチャプチャルの新しい形式を両方とも理解した話者が存在する。ただ、普段は常に満洲語文語の形式で使うことが多い。

6 まとめ

本研究では、先行研究に示されている諸地域のシベ語の口語と、筆者が採録した各地域のシベ語の音の対照を行い、音変化の過程を考察した。本研究の結論は以下のようにまとめられる。

先行研究 (李樹蘭 1997) の分析を出発点とし、以下のような事実が新たに発見された。

李樹蘭 (1997) は、満洲語文語において母音 i の前に現れる a、あるいは二重母音の ai はチャプチャルの方言のみで [ɛ] へのウムラウトが見られるのに対し、イチャガシャンの方言では文語と同様 [a][ai] のままウムラウトが見られないと述べている。しかし、今回の筆者の調査により、李樹蘭 (1997) とは反対にイチャガシャンの方言でウムラウトが見られ、チャプチャルの方言ではウムラウトが見られなかった。

また、チャプチャル方言について、李樹蘭 (1997) はチャプチャルの方言ではウムラウトが起こっているのに対し、今回の筆者の調査ではウムラウトは観察されず、満洲語文語と近い、チャプチャル方言の満洲語文語の音形が新しい形式として入ったことが明らかになった。

今後の課題として、まず本研究で解明されていない音変化について再検討する必要がある。例えば「雄 (鶏)」は満洲語文語で amila であるが、李樹蘭 (1997) の語彙調査では、チャプチャルでもイチャガシャンでも語尾の鼻音 n がついている。満洲語文語には n が無いのに対し、口語では n がつくことがある。また、李樹蘭 (1997) で扱われているタルバガタイの方言についても扱うことができなかったため、今後、調査研究を進める必要がある。服部四郎・山本謙吾 (1956[1969]) によると、チャプチャルの他のニルの方言についても差異が存在する可能性があるため、今後は他のニルの方言についても調査研究を進めること

により、シベ語内部の方言的差異をより体系的に明らかにしたい。

参考文献

- 服部四郎・山本謙吾（1956[1969]）「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』第30号, pp.1-29.（山本 1969, pp.11-32 に再録）
- 李樹蘭（1997）「錫伯語内部差異和促発語言演變的因素（シベ語の内部的相違と言語変遷を促進する要素）」『民族語文』第1期, pp.69-75.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豊（1986）『錫伯語簡志（シベ語簡志）』北京：民族出版社.
- 烏拉熙春（1986）「錫伯語和滿語書面語某些語音的比較（シベ語と満洲語文語のいくつかの音韻の比較）」『民族語文』第6期, pp.61-68.
- 呉元豊（2022）「清代伊犁索倫營述要（清朝イリソロン營概論）」『清史研究』第2期, pp.58-68.
- 山本謙吾（1969）『満洲語口語基礎語彙集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 趙傑（2012）「新疆伊犁伊車嘎善錫伯語詞滙与清代滿語比較后的音變特点（新疆イリイチャガシャンシベ語の語彙の清代満洲語との比較における音変化の特徴）」『北方語言論叢』pp.11-28.
- 鄭仲燁（2019）「察布查爾錫伯語五牛泉口音初探（チャプチャル・シベ第五ニルの口語音の初歩的研究）」『満族研究』第1期, pp.68-72.

On the Distorted Sound Correspondence in Sibe Dialects

Jinger WEN

(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Sibe language, dialect studies, umlaut, sociolinguistics

This study discusses the differences between the various dialects of Sibe language, based on material from previous studies and material collected by the author during field research, and explains the factors that cause these differences. According to a previous study by Li Shulan (1997), the vowel *a* before the vowel *i* occurs as an umlaut in the Cabcal dialect compared to the Manchu language, but not in the Icegashan dialect. However, in the material collected during the author's research, contrary to Li Shulan (1997), umlauts are found in the Icegashan dialect and not in the Cabcal dialect. In other words, in Li Shulan's data and the author's data, the Cabcal and Icegashan dialects are reversed in terms of the presence or absence of umlauts. In this study, this is referred to as a 'distortion', and the aim is to explain how such a twisted correspondence came about. In conclusion, the form of the author's Icegashan dialect matches the form of Li Shulan (1997) Cabcal dialect and is subject to the transmission of Li Shulan (1997) Cabcal dialect, and the author's Cabcal dialect is close to the Manchu form of the language, indicating that a change to a new form of Cabcal dialect has occurred.

(ブン・セイジ wenjinger08@gmail.com)